

## ソヴェト同盟共産党新綱領における労働者階級独裁の問題について

柳, 春生  
九州大学法学部

<https://doi.org/10.15017/1446>

---

出版情報 : 法政研究. 29 (1/3), pp.287-300, 1963-02-28. 九州大学法政学会  
バージョン :  
権利関係 :

## ソヴェト同盟共産党新綱領における

### 労働者階級独裁の問題について

柳 春 生

#### 問題の提起

一九六一年十月ソ同盟共産党第二回大会で採択された「ソヴェト同盟共産党綱領」は、一九一七年十月社会主義革命によって樹立されたソヴェト国家の本質をなすプロレタリア独裁が自己の歴史的使命、社会主義社会の建設の完了、を果したることによって自己の存在理由を喪失し、それをつうじてソヴェト社会主義国家はプロレタリア独裁の国家から全人民国家への転化の時期に入った、ということを確認した。すなわち――

「社会主義革命によって生まれたプロレタリアート独裁は、ソ同盟における社会主義の勝利を保障して、世界史的役割をはたした。と同時に、プロレタリア独裁そのものが、社会主義建設の過程で変化をとげた。搾取階級が根絶されたために、搾取階級の反抗を抑圧するというプロレタリア独裁の一つの機能は消滅した。そして、社会主義国家のおもな機能――経済的・組織的機能と文化的・教育的機能――が全面的に発展した。社会主義国家はその発展の新しい時期にはいった。国家が、社会主義社会の勤労者の全人民的組織に成長転化する過程がはじまった。プロレタリア民主主義は、ますます全人民的、社会主義的民主主義に転化してきた。

労働者階級は、自己の権力を永久化することを目的としない史上唯一の階級である。

プロレタリア独裁は、共産主義の第一段階である社会主義の完全で最終的な勝利と共産主義の全面的な建設への社会の移行とを保障したことによって、その歴史的使命をはたしおわり、国内的発展の任務からみて、ソ同盟では必要ではなくなった。プロレタリア独裁の国家として生まれた国家は、今日のあたらしい段階では、全人民の国家、全人民の利益と意志とを表現する機関に変わった。労働者階級は、ソヴェト社会のもっとも先進的な、組織された勢力である以上、共産主義の全面的建設期においても、指導的役割をはたすのである。労働者階級が、社会の指導者としてのその機能をはたしおわるのは、共産主義が建設されて、階級が消滅するときである。

党は、労働者階級の独裁が国家の死滅以前に必要なでなくなるという立場にたっている。全人民の組織としての国家は、共産主義が完全に勝利するまで存続するであろう。」

新綱領は、ソ同盟において社会主義建設が完全にかつ最後のになしとげられ、共産主義の全面的建設への移行が開始されたことを契機として、プロレタリア独裁の機能が解消し、全人民の国家への転化がおこった、ということを示すことによってプロレタリア独裁の歴史に新しい理論的内容を附與した、といいうるであろう。プロレタリア独裁の理論は、マルクス・エンゲルスによって「共産党宣言」において古典的形態において創始され、西ヨーロッパの労働者階級の革命的闘争の歴史的経験を素材として深められた。プロレタリア独裁にかんするマルクス・エンゲルスの理論は、西欧でなく、ロシアの社会民主労働党において継承され、一九一七年十月社会主義革命によるソヴェト国家の樹立、古い生産関係の変革という深刻な社会革命の経験をつうじてレーニンによって完成された。スターリンは、ソ同盟における社会主義建設の経験にもとづいて、主としてその論文「レーニン主義の基礎について」、「レーニン主義の諸問題によせて」のなかでプロレタリア独裁にかんするレーニンの理論を総括した。この総括をつうじて提起さ

れたスターリンのプロレタリア独裁の理論はヴィシンスキーによって踏襲され、その労作「国家と法の理論上の諸問題」のなかの諸論文において詳論され、一般化された。

プロレタリア独裁の問題は、東南欧諸国および中国における人民民主主義革命と国家の性格にかんする論争のなかで、理論的、実践的に反省された。<sup>(一)</sup>この論争をつうじて、プロレタリア独裁の問題は、社会主義建設と関連して提起されるべきことが確認された。<sup>(二)</sup>しかし、この問題の理論的發展は、一九五六年二月ソ同盟共産党第二〇回大会におけるスターリンの個人崇拜の徹底的な批判「個人崇拜とその結果について」、ならびに同年七月三十日同党中央委員会総会の決定「個人崇拜の克服およびその結果について」を端初として展開された。この大会でフルシチョフ、ミコヤンによって提起され、つづいて各国の共産党において国際的に討論された問題は、社会主義革命とプロレタリア独裁の形態にかんする問題であった。<sup>(三)</sup>これにたいして、プロレタリア独裁の本質の究明は、中国革命の経験に立脚して、スターリンの果たした役割を正しく評価し、批判した、毛沢東「プロレタリアートの独裁の歴史的経験について」、「ふたたびプロレタリアートの独裁の歴史的経験について」のなかで發展せしめられ、つづいて、一九五七年十一月十二カ国共産党・労働者党モスクワ会議の宣言において問題点が収約された。<sup>(四)</sup>一九五九年ソ同盟共産党第二一回大会は、ソ同盟が新しい歴史的時期、共産主義の全面的建設の期時に入ったことを確認し、社会主義から共産主義への移行期における社会主義国家の理論を具体的に提起したが、プロレタリア独裁にかんする問題は、即自的には提起されず、<sup>(五)</sup>發展をみなかった。

このように、プロレタリア独裁の問題史を概観するとき、ソ同盟共産党第二二回大会で採択された同党新綱領における前掲プロレタリア独裁にかんするテーゼがいかに創造的な内容のものであるかが理解される。それは、プロレタリア独裁にかんする新しい、厳格な理論構成を要求しており、そのためには、マルクス・エンゲルスの古典的学説、

就中レーニンの理論の再検討が要請される。昨年新綱領草案が発表されるとともに開始され、綱領採択以後いまなお続けられているプロレタリア独裁と全人民国家の特質にかんする討論は、プロレタリア独裁の理論を全面的に発展せしめた。就中、ア・ブテンコ「プロレタリア独裁の歴史的使命」（「コムニスト」誌、一九六一年第一四号）、ペ・エス・ロマーシュキン「ソ同盟共産党綱領草案における国家と法の発展の諸問題」（「ソヴェト国家と法」誌、一九六一年第一〇号）、デ・イ・チエスノコフ「ソ同盟共産党綱領とマルクス・レーニン主義理論の若干の問題」（「ソ同盟共産党史の諸問題」、一九六一年第六〇号）、エフ・イ・カリニツェフ「社会主義国家の基本的特徴とその概念規定」（「ソヴェト国家と法」誌、一九六二年第一号）、エム・ベ・シェンドリク「プロレタリア独裁の歴史的作用」（「ズナニエ」、哲学第二シリーズ、一九六二年）、ア・ボーヴィン「プロレタリア独裁の国家から全人民国家へ」（「コムニスト」、一九六二年第五号）、ア・ペ・ゴスイツィン「ソヴェト社会主義国家の発展の基本的段階について」（「ソヴェト国家と法」、一九六二年第三〇号）、Rolf Schüsseler, *Probleme der Marxistisch-leninistischen Staatstheorie im Lichte des neuen Programms der Kpdsu.* (Staat und Recht. 1962. 1.) ア・イ・レペシユキン「全人民国家とその基本的特質」（「ソヴェト国家と法」、一九六二年第九号）、ア・ペ・コスィツィン「プロレタリア独裁の歴史的役割」（「ソ同盟共産党史の諸問題」、一九六二年第五号）、「共産主義の全面的建設の時期における社会主義的組織の発展の諸問題」（「哲学の諸問題」誌、一九六二年第八号）、が注目すべき労作としてあげられる。プロレタリア独裁から全人民国家への移行にかんする問題の研究は、ソヴェト憲法改正の核心となる意味できわめて重要である。

さらに、一九六一年七月に採択された日本共産党新綱領は、日本の当面する革命を日本の労働者および人民にたいして敵対的關係にあるアメリカ帝国主義と日本独占資本の支配に反抗する、新しい民主主義革命と規定し、さらにこ

の革命が社会主義革命への移行の路線をきりひらく役割をもつことを確認しつつ、日本人民の最後の解放は、プロレタリア独裁と社会主義の建設によって保障される、と規定した。「社会主義社会は共産主義社会の第一段階である。この段階においては人による人のいっさいの搾取が根絶され、階級による社会の分裂はおわる。」  
よって、このような問題意識と以上に総括した研究の成果にもとづき、プロレタリア独裁の本質にかんする理論上の問題点を検討する。

## (一)

プロレタリア独裁の基本的観念は、マルクス・エンゲルスにおける科学的社会主義の古典的の学説のなかで定立された。彼等は、「共産党宣言」において、プロレタリア独裁をプロレタリアートがブルジョアにたいしておこなう階級闘争の発展過程のうちに位置づけ、そしてプロレタリアートと全社会とが解放されるための政治的条件として規定した。「宣言」は、プロレタリア独裁の歴史的使命を階級一般の廃止にみている。「プロレタリアートは、ブルジョアととの闘争において必然的にみづからを階級に結合し、革命によってみづから支配階級となり、そして支配階級として強制的に旧生産関係を廃止するが、またこの生産関係とともに階級の対立の存在条件を、階級一般を廃止し、それによってまた階級としての彼自身の支配をも廃止する。階級と階級対立をとともなう旧ブルジョア社会にかわって、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような、一つの協同社会があらわれる。」

マルクスは、プロレタリア独裁を、資本主義社会を階級のない社会主義社会に変革するための槓杆として把握する。それゆえに、プロレタリア独裁は、恒久的性質のものではなく、資本制生産様式の上場から共産主義社会にいたる過渡期の権力たる意義をもつ。「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時

期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにもでもありえない。」（マルクス「ゴーター綱領批判」）このように、マルクスにおいては、共産主義社会は無階級社会として把握されている。しかも、共産主義社会は、必要に応ずる分配が可能となる高次の段階（本来の意味での共産主義社会）と労働に応ずる分配のみが可能な生産力しか示さない低次の段階（いわゆる社会主義）とに區別されている。だから、マルクスは、資本主義社会から、階級的対立と差異とが完全に廃棄される社会主義社会にいたる過渡期の権力の必然性にプロレタリア独裁の本質をみた。

労働者階級の目標は、共産主義社会の樹立であり、したがってこの階級の歴史的使命は社会の全勤労者を共産主義に導くことにある。この見地にたつて、プロレタリア独裁の歴史的役割は、共産主義の第一段階たる社会主義の建設を完成し、それによって資本主義に内在する矛盾、すなわち人による人の搾取と、ならびにその基盤となる社会の階級的分裂とに終止符をうつことにある。この理念にもとづき、一九〇三年に採択されたロシア社会民主労働党綱領は、プロレタリア独裁を社会革命の不可欠の条件として規定した。そして、この不滅の命題は、社会主義の建設という任務をかかげた一九一九年のロシア共産党綱領にとり入れられた。レーニンの述べるように、「プロレタリアートの独裁をつうじるよりほかには人類は社会主義へ到達するものではない。」<sup>(七)</sup>「それゆえに、こんどの第三の綱領——共産主義建設の綱領は、「社会主義革命の勝利と社会主義建設にとって不可欠の条件は、プロレタリアートとマルクス・レーニン主義政党的指導である。」とより明確に規定する。プロレタリア独裁なくしては、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係に変革することは不可能である。

プロレタリア独裁の理論は、ロシアにおける社会主義革命と社会主義建設の実践の過程においてその内容を具体的に豊かにした。まづ、プロレタリア独裁の本質はどのように理解せらるべきであろうか。

プロレタリア独裁という概念の基本的内容は、それが労働者階級という一つの階級の権力である、という点にある。これについてレーニンの述べるところをみよう。

「政治的支配をその手中に握った階級は、この支配を単独で握ることを意識してこれを握ったのである。このことは、プロレタリア独裁の概念のなかに含まれている。」<sup>(八)</sup>

プロレタリア独裁は、プロレタリアートの社会主義革命の権力である。このプロレタリアートの単独の権力は、スターリンによって「権力を他の階級とわかたないし、また、わかつことのできない一つの階級、すなわちプロレタリア階級の権力」と規定され、ヴィシンキスによって「プロレタリアートは、他の階級とのあいだに政治的支配権をわかつたないし、またわかつことができない。」<sup>(九)</sup>と説明されているが、この解釈は今日においても承認されうる。<sup>(一〇)</sup>それは、プロレタリアートがいかなる他の階級とも権力をわかたない、したがって、プロレタリアートの党、共産党が他の諸政党とプロレタリア独裁のなかでの指導をわかちえない、<sup>(一一)</sup>ということはいかなる根拠によって肯定されうるであろうか。

この理由は、「共産党宣言」の「今日ブルジョアシーに対立しているすべての階級のなかで、ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級である」という命題によって説明されうる。一九〇三年ロシア社会民主労働党第二回大会における党綱領の審議に際し、レーニンは、「プロレタリア独裁の必要を認めることは、ひとりプロレタリアー



トだけが真に革命的な階級であるという『共産党宣言』の命題と、もつとも緊密に、切つても切ないように結びついているのである。<sup>(二四)</sup>」と述べている。すなわち、労働者階級のみが社会主義的生産様式の意識的な担当者であること、彼のみが社会主義的労働規律と組織性を身につけている、という理由による。この視点から、「労働者階級はこの段階において社会主義的生産型式の唯一の担当者であるかぎり、自己の意志を実現して、社会主義的原理で生産を再編成しながら、他のすべての諸階級を支配しなければならぬ。彼は自己の社会主義的生産様式を一般化する使命をもっている。」<sup>(二四)</sup>というブテンコの説明は肯定される。

だが、資本主義社会の社会主義的再編成を志向する労働者階級の権力は、労働者階級の利益ばかりでなく、非プロレタリア全勤労働者の利益をも表現する。なぜなら、両者の根本的な利益は一致するからである。それゆえに、この利害の一致が労働者階級と非プロレタリア勤労大衆、就中農民階級との階級的同盟を可能ならしめる。労働者階級の権力は自己の歴史的使命を実現するにあたり、彼等の援助を必要とする。それゆえに、スターリンが「この権力、この一つの階級の権力は、プロレタリア階級と小ブルジョア諸階級の勤労大衆、なによりも第一に勤労農民大衆とのあいだの特殊な形態の同盟によって、はじめて確立され、徹底的に遂行されるのである。」<sup>(二五)</sup>と述べているように、プロレタリア独裁は、広汎な階級の同盟に、労農同盟に基礎をおく、人民の権力となる。しかし、非プロレタリア勤労者、小ブルジョア階級はその階級の性格において動搖的である。それゆえに、この同盟における指導役割はプロレタリアートの側にあらねばならない。レーニンは、プロレタリアートが指導的役割をもつ、プロレタリアートと農民との同盟を、プロレタリア独裁の最高原則と規定した。<sup>(二六)</sup>プロレタリア独裁の核心は、階級的対立が内在する社会の社会主義的再編成の過程における労働者階級の指導に在する。

プロレタリアートの権力の歴史的役割は、社会主義建設を完遂することに存する。そのために課せられる最初の歴

史的任務は、資本主義の復活を企図する搾取階級の反抗の抑圧である。搾取制社会を社会主義的に変革するためには、労働者階級は、第一に彼に敵対的な階級を抑圧し、絶滅しなければならぬ。それゆえに、レーニンが述べるように、「独裁の欠くことのできない標識、独裁の必須の条件は、階級としての搾取者を暴力的に抑圧することである。」<sup>(二七)</sup>「コシツインのいうように、搾取階級の存在こそがプロレタリア独裁を必要とする第一の条件である。プロレタリア独裁の強制的側面を強調してレーニンはつぎのように述べる。「独裁という科学的概念は、なにもものにも制限されない、どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力以外のなにものも意味しない。」<sup>(二八)</sup>「この権力は、だから由来するものにせよ、他のどうの権力も、どうの法律も、どうの規範もみとめていなかったからである。無制限の、法律外の、もっとも直接的な意味での力をよりどころとした権力、これこそ独裁である。」<sup>(二九)</sup>すなわち、プロレタリアートの革命権力は、彼に敵対する搾取階級の権力とその意思たる法律規範から独立たるべきである。それは、ヴィシンスキーのいうように、自己の制定する法律のみには服従する。<sup>(三〇)</sup>それでは、この権力が依拠するところの力の根源するものはなにか。レーニンはこう説明する。「それではこの力は、一体なにをよりどころとしていたのか？それは人民大衆をよりどころとしていたのである。まさに、旧権力のあらゆる従来の機関と、この新しい権力との基本的な相違である。……これが、革命的人民の独裁と、人民にたいする独裁との相違である。」<sup>(三一)</sup>

それゆえに、プロレタリアートの独裁は、プロレタリアートのブルジョアジーにたいする新しい形態における階級闘争の継続と規定される。<sup>(三二)</sup>したがって、階級としての搾取者の絶滅は、社会主義建設にたいする第一の阻止的要因の除去を意味するかぎり、プロレタリア独裁が階級闘争として機能する範囲の縮減となる。<sup>(三三)</sup>しかるに、スターリンは、一九三三年、第一次五カ年計画の実施によって資本主義的分子が工業から完全に駆逐され、最後の搾取階級たる富農

が絶滅されたとき、「階級の廃絶は、階級闘争の鎮静によってでなく、その強化によって達成されるものである。」<sup>(一四)</sup> という誤った方式を提起している。<sup>(一五)</sup> まさしく、シェンドリックが批判するように、階級闘争の激化は、敵対的な階級の存在によってのみ可能となる。<sup>(一六)</sup>

しかしながら、搾取階級にたいする暴力、強制の機能は、プロレタリア独裁の特徴をなすとはいへ、プロレタリア独裁の基本的内容をなすものではない。それらは、社会主義の建設にとって阻止的要因となる敵対的な階級的矛盾を除くための必須の措置として意義をもつ。それゆえに、プロレタリア独裁の本質は社会主義の建設に存する。レーニンは、「プロレタリア独裁の本質は、暴力一つにあるのでもなければ、主として暴力にあるのでもない。プロレタリア独裁の主要な本質は、勤労者の先進部隊、その前衛、その唯一の指導者であるプロレタリアートの組織性と規律にある。」<sup>(一七)</sup>と述べている。すなわち、レーニンは、搾取者の反抗にたいする暴力をプロレタリア独裁の不可欠の機能として認めつつも、この暴力の源泉をプロレタリアートの組織性と社会主義的規律にもとめた。したがって、プロレタリアートの独裁的権力は、たんなる暴力でなく、労働者階級の高度の組織性と規律とに支えられた、理性的な力であり、かつそれゆえにこそ、非プロレタリア勤労大衆にたいして指導性をもちうるのである。

このようにみると、プロレタリア独裁の第二の重要な任務は、非プロレタリア勤労諸階級の小ブルジョア的性質を改造し、彼等を社会主義の方向に指導することにある。そして、この指導関係のうちひそむ階級間の対立の存在が、プロレタリア独裁を必要とする第二の条件となる。<sup>(一八)</sup> これらの階級は、深刻な社会的変革に際して旧慣習、伝統に固執し、動揺し、また消極的な抵抗を示すが、しかし、その階級的性格においては、プロレタリアートにたいして敵対的ではない。プロレタリアートの彼等にたいする指導は、この動揺と抵抗の克服、という意味において一つの階級闘争として規定されるが、その特質は、同盟者のあいだの関係、すなわち非敵対的矛盾の止揚の関係として把握されね

ばならない。<sup>(二九)</sup>

それでは、プロレタリアートによる勤労大衆の指導にはなぜ権力を必要とするであろうか。第一に、搾取階級の反抗を抑制する威力をプロレタリアートが示さないでは、動揺せる小ブルジョア諸階級を彼の側に引寄せすることはできない。第二に、しかし、プロレタリアートの権力はたんなる強力ではなくして、彼の社会主義的規律に支えられた、正理の権威、たらねばならない。レーニンの述べるところを示そう。

「プロレタリアートが農民を、一般にすべての小ブルジョア層をひきいてすすむためには、プロレタリアートの独裁が、一階級の権力が、この階級の組織性と規律の力が、資本主義の文化、科学、技術のいっさいの達成に立脚する彼らの集中された威力が、あらゆる勤労者の心理への彼らのプロレタリア的な身近さが、分散した、おくれた、政治的堅固さの点でおとる農村または小規模生産の勤労者にたいする彼らの権威が、必要である。」<sup>(三〇)</sup>

プロレタリアートによる勤労者・小ブルジョア層の指導の方法は、原則的には説得によるが、社会主義的規律の強制をも排除しない。レーニンの「なによりもまづ、われわれは説得し、そのあとで強制しなければならぬ。」<sup>(三一)</sup>という指摘は、この場合にも妥当する。

一九三六年、ソ同盟において社会主義の基礎が建設され、搾取階級は都市・農村において一掃され、非プロレタリア勤労諸階級のうちでもっとも主要な階級たる農民がコルホーズ農民に転化し、それによって勤労者と農民とが相互友好的な社会主義的階級に成長したとき、ソ同盟新憲法はなおプロレタリア独裁の条項をかかげた。それは、憲法案の説明にてスターリンが述べているような、たんに指導権が労働者階級の側にあるということではなく、コルホーズ農民がまだ往時の私有者の心理、伝統、孤立性・閉鎖性という小ブルジョア性格を完全に脱却していなかったことによるのである。<sup>(三二)</sup>それゆえに、社会主義の「完全な最終的な建設」によって、ソヴェト国民の政治的・精神的統一が形

成され、労働者と農民とのあいだの階級的矛盾が主要な点において克服されたとき、<sup>(三四)</sup>プロレタリア独裁はその歴史的使命を果し、ソヴェト社会主義国家は、プロレタリア独裁の国家から全人民国家への成長転化の時期に入るのである。こうして、我々は、上記ソヴェト共産党新綱領の命題の正しさを理解することができる。

- (一) 柳春生「ソヴェト憲法とプロレタリア独裁の問題」(「ソヴェト研究」4、一九四九年)参照。
- (二) 柳春生「東欧人民共和国の本質」(「人民民主主義の研究」上)参照。
- (三) 柳春生「现阶段における民主主義と社会主義」(森教授記念論文集、昭和三十三年三月)参照。
- (四) 村田陽一「マルクス主義理論の現状」(「エコノミスト」、一九五八年第一六号)参照。
- (五) 柳春生「ソ連共産党第二一回大会とマルクス主義国家論の基本問題」(一九五九年六月「アカハタ」参照)。
- (六) 畑中和夫「ソ連憲法改正の問題点」(「法律時報」第三四卷五〇号)参照。
- (七) レーニン全集二九卷、三二九頁。
- (八) レーニン全集三二卷、二五〇頁。
- (九) スターリン「レーニン主義の諸問題」、第十一版、一一九頁。
- (一〇) ヴィシンスキー「国家と法の理論上の諸問題」、三六六頁。
- (一一) エム・ア・セレズネフ「国家、革命、プロレタリアートの独裁」、一九六〇年、八二頁、邦訳、九四頁。シェンドリク、上掲書、五頁。
- (一二) スターリン、前掲書、一一九頁。
- (一三) レーニン全集、六卷、三五頁。
- (一四) プテンコ、上掲論文、五一頁。
- (一五) スターリン、前掲書、一一九頁。

- (二六) レーニン全集、三二卷、四六六頁。
- (二七) レーニン全集、二八卷、二三五頁。
- (二八) レーニン全集、三一卷、三二六頁。
- (二九) レーニン全集、三一卷、三二四頁。
- (三〇) ヴィシンスキー、前掲書、三六一―三六二頁。
- (三一) レーニン全集、三一卷、三二四頁。
- (三二) レーニン全集、二九卷、三五〇頁。
- (三三) コシツイン「ソヴェト社会主義国家の発展の基本的段階について」、二八頁。
- (三四) スターリン、前掲書、四二九頁。
- (三五) 「個人崇拜の克服およびその結果について」、「ソ同盟共産党決定集」、4、二三九頁。
- (三六) シェンドリク、上掲書、二六頁。
- (三七) レーニン全集、二九卷、三五八頁。
- (三八) コシツイン「プロレタリア独裁の歴史的役割」、三三頁。
- (三九) シェンドリク、上掲書、一三頁。
- (四〇) レーニン全集、二九卷、三五九頁。
- (四一) レーニン全集、三二卷、一八九頁。
- (四二) 「哲学の諸問題」誌、一九六二年第八号、一五七頁、レペシユキンの見解参照。
- (四三) コシツイン「ソヴェト社会主義国家の発展の基本的段階について」、二八頁。シェンドリク、前掲書、二五頁。
- (四四) シェンドリク、二八頁。「哲学の諸問題」誌八号、一五六頁、チェスノコフの見解参照。フルシチョフ、ソ同盟共産党第

論 說

三回大会報告、邦訳、四六頁。——一九六二・一一・二五——(終)